

## ハバクク書における義の問題

津村 俊夫

ハバクク書二章四節後半は、新約聖書の中で、パウロ書簡で二回（ローマ一・一七、ガラテヤ三・一一）、ヘブル書で一回（一〇・二八）、合計三回引用されており、聖書の「救済論」を扱う際に、避けて通ることの出来ない重要な箇所である。一般に、新約聖書による旧約引用の問題を論じるときには、まず、旧約テキストの文脈を十分考慮に入れた釈義的考察を行なう必要があるが、ハバクク書二章四節後半とても例外ではない。この小論では、ハバクク書における「義」の問題を、二章四節後半だけから論じるのではなく、ハバクク書全体のテーマとの関連で考察したいと思う。

ハバクク書全体のテーマが何であるか、それは、冒頭の節（一・二）から知ることが出来る。

「いつまでですか？ 主よ。」

私が助けを求めて叫んでいますのに聞いてくださらないのは。

私がおあなたに向かつて『暴虐だ！』と叫んでいますのに救ってくださいらないのは。」

ここでは、明らかに「救い」יְשׁוּעָהのことがハバククの最大の関心事となっている。「暴虐だ！」との叫びは、このままではもう滅びるしかない、どうしようもない状態（創世記六・一、一三を参照）<sup>11</sup>であることを主に訴え、その主に助けを求める叫びであって、主からの「救い」を緊急に必要としていることの表明である。しかし、彼が必死に「叫んでいる」にもかかわらず、「義」をもって全世界を治めておられるはずの主は、ただ「労苦をながめておられる」（一・三）だけで、全然「聞こえずとされない」・「救おうとされない」——少なくともハバククにはそのような思われた。それゆえ、彼は「何故なのですか？」と主に問い続けるのである（一・三、一三）<sup>12</sup>。

このように、神による「救い」のみ業こそが、預言者ハバククの関心事であったということが出来るであろう。しかし、「救い」יְשׁוּעָהという語（動詞及びその派生語）は、注目すべきことに、この冒頭の節以降は三章の「ハバククの祈り」で四回（三・八、一三、一三、一八）出てくるだけで、二章には全く出てこない。このことは、何を意味するであろうか。二章四節を中心として「義」の問題を考察するに際しては、「救い」のテーマは直接的には関わりが無いことであろうか。そうではなく、「救い」というハバクク書の全体的なテーマの中でこそ「義」の問題を扱うべきであることを示しているのではないだろうか。「いつまで救ってくださいらないのですか？」というハバククの冒頭の訴えに対する最終的な解決が、「救い主」ご自身が「民を救うために出てこられる」（三・一三）ことに言及している三章において初めて明確に与えられているのである。<sup>13</sup>「救い」が正に「救い主」であられる神ご自身から来ることによって成就するということを、ハバクク書が全体として主張しているのである。

以下において、我々は「ハバクク書における義の問題」を、「救い」のテーマとの関わりの中で論じることにした  
と思う。二章四節後半の「*צדק* (正しい者)」という語の意味を明らかにしようとする前に、ハバクク書において  
「義」の概念を表現しているいくつかの箇所を検討することが必要である。

### I 一章四節における *צדק* の意味

「それゆえ、*צדק* は骨抜きにされ、  
*צדק* が全く行なわれていません (直訳：出て行きません)。

悪者が正しい人を取り囲んでいるのです。

それゆえ、不正な *צדק* が行なわれています。」

*צדק* は、「さばき・定め・公義・訴え・権利」(名尾)などと訳出されるが、本節のそれは、邦訳聖書で、「公義」  
(文語・口語)・「さばき」(新改)・「正義」(新共同)などと訳されている。名尾『ヘブル語大辞典』は、この箇所の  
*צדק* を「公義・公正」の項に分類している。<sup>51</sup>

本節の *צדק* は、<sup>52</sup> 並行法によって「*צדק* (おしえ・律法) に対応し、両者で同義的な対語 (synonymous word pair) を構成している。*צדק* (単数形) と *צדק* (単数形) とが対語になっている例は、旧約聖書の中でこの他に  
五例ある。その内二例 (民数記一五・一六、申命記一七・一一) は契約の民に対する具体的な「さばき」又は判決  
に関するもので、一例 (詩篇八九・三一) は律法における個々の「定め」のことを指している。ハバクク書一章四  
節での用法と類似しているのは、イザヤ書四二・四と五一・四である。

### イザヤ書四二・四

「彼は、ついには、地に *צדק* を打ち立て、

島々も、彼の *צדק* を待ち望む。」

ここでは、対語の順序が、通常とは違い、入れ替わっているが、並行法全体で言われていることは、具体的な律  
法の定めのことではなく、神による「正しいさばき」・「義の支配」、即ち「神の普遍的な支配」(“God's universal  
rule”)<sup>53</sup> の到来のことである。異邦の民は、「主だけが神である」ことを認めるようになるのである。<sup>54</sup>

### イザヤ書五一・四

「*צדק* はわたしのもたらして行き、

わたしはわたしの *צדק* を定め、諸民族への光とするからだ。」

ハバクク書一・四では、動詞「出て行く」の主語は *צדק* であるが、ここでは「*צדק*」である。この箇所でも「*צדק*  
と *צדק*」との対語は、「神の普遍的な支配」を意味していると言える。このことは、*צדק* が、ウカリト語の *mpi*  
「主権・定め・運命」<sup>55</sup> や、語根 *צדק* の意味「さばく・支配する」(BDB) から示唆されているように、主権者又は  
支配者による「さばき・支配」を意味しうることから支持されるであろう。

ハバクク書一章四節の場合も、*צדק* は神による「さばき」や「支配」のことを意味していると考えることがで

きる。「*ḥ*」が骨抜きにされている」ということは、*ḥ*が「全く行なわれて (*YS*) いない」ということであり、——この状態は、直前の節 (二・一三) で「暴虐」という語で表わされている——「救いの神」ご自身が救うために「出て来られる」 (*YS*: 三・一三) までは真の解決を見ることがない。*ḥ*の「明白なる違反」<sup>10</sup> 又は「無視」である「暴虐」 (*ḥ*: 一・二、三、九、二・八、一七、一七) は、義なる神ご自身によってきはかれなければならない。ハバクク書一章四節における *ḥ* は、「*ḥ*」と共に、神の主権を前提とした「法と秩序」<sup>11</sup> を意味していると言える。それは、神ご自身が「義なるきはき主」・「救い主」であることに基づいている。

## II 一章四節及び二・三節における「*ḥ*」

ハバクク書には「*ḥ*」という語が三回でてくるが、そのうち二回 (一・四、一三) はハバクク自身によって用いられ、あとの一回 (二・四) は神によって用いられている。同じ語が使われていても、その語の意味というものは、それがどのような文脈 (即ち、言語的脈絡) にあらわれ、しかも誰によってどのような状況 “the actual spatiotemporal situation” (即ち、言語外の脈絡) で発話されたかによって異なってくる。<sup>12</sup> それゆえ、一章四節の「*ḥ*」について考察する前に、他の箇所での「*ḥ*」の意味と用法に注目しておきたいと思う。

### (a) 一章四節の「*ḥ*」

- a … それゆえ、「*ḥ*」は骨抜きにされ、
- b … *ḥ* が全く行なわれていません。

- c … 悪者が正しい人 (*ḥ*) を取り囲んでいるのです。
- d … それゆえ、不正な *ḥ* が行なわれています。

本節は、四行の詩的並行法<sup>13</sup>を構成しており、「それゆえ」が最初と最後の行 (a & d) にあらわれ、それらがインクルージオになって四行全体のまとまりを支えている。三行目 (c) は、その前後の行とは違い、ハバククを取り巻いている状況を具体的に表現している。そのことは冒頭の「直示的な」(話者基準的な) 助辞 *ḥ* によって示されており、これによってハバククは、聞き手である神に対してそのような状況に特別の注意を払うように求めている。「悪者が取り囲んでいるですよ、*ḥ*」と。

この「悪者」が誰のことを言っているのかについては、諸説があるが、一章四節の文脈が、バビロニア人のことに言及している一章二・三節のそれとは異なっていることから、ここでは国内の「悪者」のことを言っていると考えるべきであると思う。このことは、本節の「*ḥ*」に冠詞がついていることからとも言えるかも知れない。それは、助辞の「*ḥ*」を伴って「取り囲んでいる」(participle) の目的語となっているが、ハバクク書で冠詞を伴った (又は限定された意味の) 名詞が「*ḥ*」を取って目的語となる例は、このほかに三例、一・六 (*ḥ*), 二・一四 (*ḥ*), 三・一三 (*ḥ*)、あるのみで、「*ḥ*」に冠詞がついているのはここだけである。ヘブル語の冠詞は、詩文においては非常にしばしば省略される<sup>14</sup> にも関わらず、ハバクク書で初出のこの「*ḥ*」に冠詞がついているのである。ハバククは恐らくそのことによって「正しい者」と「悪者」の対比を強調しているのではないだろうか。国内の人間社会にあって「悪者が正しい人の方を、*ḥ*」苦しめていることに対して、ハバククは我慢がならなかったのである。このように、「*ḥ*」は、一章四節では、「*ḥ*」と「*ḥ*」の項対立 (binary opposition) の意味関

係を持つ語として用いられている。<sup>83</sup>

### (b) 一章一三節後半 (c & d) の「*עוֹרֵךְ*」

- c. 「なぜ、あなたは裏切り者をながめて黙っておられるのですか、
- d. 「悪者 (*עוֹרֵךְ*)」が自分より正しい者 (*יָשָׁר*) をのみこむときに。」

六一一節で描写されている「悪者」カルテヤ人の姿を見させられたときに、ハバククは、「強暴で激しい国民」(一・六)であり、「自分の力<sup>84</sup>が自分の神」(一・一一b)となっている罪人の典型をそこに見た。このような「悪者」が「自分より正しい者」を滅ぼそうとするなんて、「なぜなのですか?」と、もう一度、ハバククは主に訴えるのである。

ここでは、「*יָשָׁר*」は、「*עוֹרֵךְ*」と二項的に対立した概念を表わす語であるというよりも、むしろ「*עוֹרֵךְ*」と「段階的に」又は「関係的に」対立している語 (“graded opposite” / “relational opposite”) <sup>85</sup>として用いられている。その二とは比較を表わす前置詞「*בְּ*」によって表わされているが、「正しい」ということが「悪者より正しい」という相対的な表現の中で規定されているのである。

以上の事から、ハバククは、「*יָשָׁר*」という語を、「*עוֹרֵךְ*」と二項的に対立する概念(「悪者」ではないもの)、あるいは「*עוֹרֵךְ*」と相対的に、即ち、「段階的」又は「関係的」に対立する概念(「悪者」よりも正しいもの)を表わす語として用いていることがわかる。

### III 二章四節における「*אֱלֹהִים*」

本節における「*אֱלֹהִים*」は、前の二例とは違い、「書いて確かなものにせよ」(二・二c)と命じられた「啓示」(「幻」)の中で、神が用いられた語である。それはハバククが用いた語と同じ語「*אֱלֹהִים*」であるが、その言語形式が同じではあっても、その「意味」と「指示対象」(referent) <sup>86</sup>は異なっているかもしれない。まず、「*אֱלֹהִים*」が、その前後の文脈で、どのような語と対比されているかに注目し、次にそれがあらわれる四節後半で他の語とどのような連語関係 (collocation) を持っているかを調べた後に、この語の使用者である「神」がどのような「発話」の脈絡の中でそれを用いられたのかについて考察したいと思う。

#### A 「彼」(「*הוא*」)(二・四a)・「高ぶる者」(二・五a)との対比

さて、四節前半の本文上の諸問題は、一九八五年の拙論「ハバクク書二・四aの釈義的考察」<sup>87</sup>において詳しく論じたので、ここでは要点のみを記すことにする。ヘブル語マソラ本文(MT)をあるがままで(本文修正をしないで)理解しようと試みると、前半節では、女性名詞「彼の」(「*הוא*」)(*SMC*) <sup>88</sup>が、二つの女性形の動詞句である「ふくれ上がっている」(*VP1*)と「正直でなす」(*VP2*) — asyndeton で接続している — の主語となっている。「彼のうちで」(*CC*)と「前置詞句は、しばしば主張されるように」(「正直でなす」(*VP2*))を修飾すると考えるよりも、「ふくれ上がっている」(*VP1*)に結びついていると考える方がよい。従って、前半節は「彼の」は、彼のうちでふくれ上がって、正直ではない」という意味になり、上記の論文では、「彼は己惚れていて素直でない。」という訳出を試みた。

「 $\bar{\nu}$ 」のあらわれる後半節(四b)は、内容的に前半節(四a)と対照的な並行法を構成しているが、並行関係にある二行の各要素間の対応関係は、必ずしも典型的なものではない。この並行法においては、「話題」(TOPIC)として、後半節の「 $\bar{\nu}$ 」が前半節の「彼の $\bar{\nu}$ 」に対応している、それぞれ「彼の $\bar{\nu}$ 」によって「生きる」と「彼のうちでふくれ上がっている」、正直ではない」という「評言」(COMMENT)が与えられている。<sup>54</sup>

a : 「彼の $\bar{\nu}$ 」 : 「彼のうちでふくれ上がっている、正直ではない」

b : 「 $\bar{\nu}$ 」 : 「彼の $\bar{\nu}$ 」によって生きる」

ここで、「 $\bar{\nu}$ 」が、一章四節や二三節のように反意語の「 $\bar{\nu}$ 」とではなく、「彼の $\bar{\nu}$ 」と対比されていることは注目に値する。二章四節がハバククの二度目の訴え(一・二二―二七)に対する神からの応答として与えられた「啓示」の内容であることからすれば、この「彼」が、カルデア人(によって代表される悪者)のことを指示していると考えられる。<sup>55</sup>このような文脈の中で、「 $\bar{\nu}$ 」は、「強暴で激しい」カルデア人のように「自分の力が自分の神」(一・一一b)となり、「 $\bar{\nu}$ 」に惚れていて、神に対して素直でない(二・四a)悪者とは対照的な存在のことを言っている。このように、「悪者」の真相が明らかにされ、それとの対比において、「正しい者」のあるべき姿が、間接的に、示されているのである。

「悪者」の真相は、続く五節においても更に繰り返し述べられている。そこでは、すでに一章一三c節でカルデア人に対して用いられた「裏切り者(pi)」「 $\bar{\nu}$ 」という表現が、「 $\bar{\nu}$ 」の描写のために単数形「 $\bar{\nu}$ 」(「欺くもの $\bar{\nu}$ 」)で用いられている。この「欺くもの $\bar{\nu}$ 」としての $\bar{\nu}$ は、次に来る「高ぶる者」の姿を効果的に描写している。そして、この「高ぶる者」は、四節前半の「 $\bar{\nu}$ 」に惚れていて素直でない「者」と対応しており、五節が四節から始まる「啓示」の内容の一部であると考えられるならば、<sup>56</sup>「 $\bar{\nu}$ 」でも「高ぶる者」である悪者の姿とは対照的な「正しい者」の姿が明らかになってくる。

以上、二章四節前半に描かれている「 $\bar{\nu}$ 」に惚れていて素直でない「悪者の真相と、五節における「高ぶる者」としての悪者の姿との対比において、「正しい者」「 $\bar{\nu}$ 」の意味を間接的に捉えてきたが、その積極的な意味は、二章四節後半における「 $\bar{\nu}$ 」の意味と用法が明らかになってはじめて明確になるであろう。

#### B 「 $\bar{\nu}$ 」によって生きる者

二章四節の並行法のキアスティックな構造(A[an+an]bc//b'c'a)<sup>57</sup>からすると、前置詞句「 $\bar{\nu}$ 」は、名詞「 $\bar{\nu}$ 」と結びついて「 $\bar{\nu}$ 」による正しい者」という名詞句を構成していると考えられるよりも、動詞「生きる」を副詞的に修飾していると考えの方がよいであろう。従って、ハバクク書のテキストに、「信仰による義人」とそうではない「義人」(即ち、行ないによって義とされようとする人)との対比を見る必要はないと思われる。

しかし、二章四節後半の「 $\bar{\nu}$ 」が、どういう意味であって、誰の「 $\bar{\nu}$ 」のことを言っているのか、そして「生きる」ということが何を意味するのか、これらのことは、ハバクク書における「義」の問題を論じる際に避けて通ることの出来ない大きな問題である。まず、人称代名詞の問題を論じた後に、「 $\bar{\nu}$ 」の意味と「生きる」ということについて考察したいと思う。

(a) 人称接尾辞「彼の／その」

「*πίστις*」の人称接尾辞「は」は、通常は、直前の名詞である「*πίστις*」を指すと考えられているが、最近(一九八〇)、Janzen はそれが二節の「幻」(「*πίστις*」)を指すと考え、「through its reliability」<sup>52</sup>と訳している。この立場は、最近の研究(例えば、「the innocent survive by believing in the vision」(Peckham 1986); “but the Righteous One because of its fidelity will live” (Haak 1988))<sup>53</sup>に於いて継承されている。Janzenによれば、四節の「*πίστις*」は、三節の「*πίστις*」や「*πίστις*」と同じように、啓示としての「幻」のことを言っており、これら四つの語は互いに結び合っている。従って、四節後半は「*saddly*の真実を信じてはなく、その幻の信頼性に言及している」<sup>54</sup>と説明する。しかしながら、彼の説は、彼自身による前半節の解釈(「なまけものについて言えば、彼の心はそれ(＝幻)の中にまっすぐ進んで行かない」(“As for the sluggard, his soul does not go straight on in it;”))に大きく依存しており、いくつかの難点を含んでいる。

第一に、彼は四節前半の冒頭の語を *ψυχή* (「なまけもの」と修正するが、そのような本文修正による解決は恣意的で説得力に欠ける。<sup>55</sup> 第二に「Janzen は、「動詞 + *νεψης* + *α*」が「魂または自己のそれ以外の何ものかに対する関係」(“the relation of the soul or self ... toward something other than itself.”)を描写しており、「*ψυχή*」があるところへ移して「*ψυχή*」(“movement toward”)を意味していると主張する。<sup>56</sup> しかしながら、彼の挙げている四つの例のうち二例(創四九・六、イザヤ四六・二)は、その動詞が本来「移動」を意味するもの(「来る」と「行く」)であり、他の二例(民二一・四、イザヤ六六・三)の動詞は「移動」とは全く関係のないものである。ハバクク書二章四節前半の動詞 *YSR* が本来「まっすぐである」という意味の状態動詞であることや、前置詞 *α* が、既

に見たように、最初の動詞 *πισ*「*πισ*」が上がついている」と結びつくと考えほうが良いことから、本節前半に「移動」を表わす表現の存在を認める Janzen の説は受け入れがたい。

以上のように、四節前半に「幻」への言及を認めることが難しいので、後半節に「幻」への言及を認めることはなお難しくなる。従って、「*πίστις*」の人称接尾辞「は」は、通常解釈されているように、直前の名詞である「*πίστις*」を指すと考えるのが一番自然で良いと思う。

(b) 「真実」／「信仰」／「信頼」:「*πίστις*」の意味

本節の「*πίστις*」は、LXX の訳語 (*πίστεως*) をローマ人への手紙一章一七節の「信仰義認」の教えを考慮して、「信仰」(文語訳・口語訳・新改訳・新共同訳)と邦訳されるが、ヘブル語の「*אמונה*」がそのように邦訳されているのはここだけである。新改訳の欄外注には「真実」という訳語の可能性をも認めている。また、関根訳は、通常の訳語「真実」とこの「信仰」を折衷して「信実」と訳している。

「*πίστις*」は、語根 *πισ* (「確かである」) に *α* と *ν* が名詞で「真実・誠実・確実」等と通常は訳される。「Jepsen はハバクク書二章四節後半のそれを、詩篇三七・三の「*אמונה*」即ち「誠実な歩みにとって欠くことの出来ない内的態度」(“that inner attitude which is prerequisite to a genuine life”) とおなじグループに分類し、「誠実さ・忠実さ・信頼できること・安定のあること」等を含む “conduct” 「やるまい・行為」を指すと説明している。そのような「*אמונה*」は「正しい者」に特有のものである。<sup>57</sup> Gunneweg は、これを「神の啓示としての律法のうちに留まること」とであると説明している。<sup>58</sup>

一方、Robertson は、ハバクク書二章四節を創世記一五章六節(「彼は主を信じた」(「*אמונה*」))。主はそれを彼の義

「*אֱמוּנָה*」と認められた。「」のアブラハムの「信仰」と比較して、ハバクク書の「*אֱמוּנָה*」を「信仰によって義とされた者」のことであると説明する。彼によれば、「創世記一五・六がハバクク書一・四に反映されていることは、義とされる「*אֱמוּנָה*」(justification)が、丁度アブラハムにとってそうであったように、ハバククにとって信仰によるのであることを示している。「」のような脈絡での「*אֱמוּנָה*」は「ゆるがない信頼」(“steadfast trust”)を意味し、ハバククはこの「信仰における確かさ」(“steadfastness in faith”)を「*אֱמוּנָה*」の賜物を受け取る方法」であると述べている。Robertsonは説明する。<sup>53</sup> 同様に「Bakerも「*אֱמוּנָה*」が「信仰」(faith)を意味しており、「主が三節で約束されたように行動されることを忍耐をもって確信して待つこと」であると考える。<sup>54</sup>

このように、二章四節後半の「*אֱמוּנָה*」は、「誠実な行為」か「ゆるがない信頼」・「信仰」を意味していると考えられるが、この文脈において明らかであることは、それが「彼に正しい者」の「*אֱמוּנָה*」であることである。「悪者の「*אֱמוּנָה*」という連語が論理的に矛盾している一方で、「*אֱמוּנָה*」は、「*אֱמוּנָה*」との連語関係においてこそ、その意味が定まるのである。従って、「*אֱמוּנָה*」の意味は、「*אֱמוּנָה*」によって意味されている「正しい者」の神の前でのあり方と密接に関わっている。更に、この語が、もう一つの鍵語である「生きる」との連語関係において用いられていることにも注目する必要がある。

(c)「生きる」ということ

既に見たように、二章四節では、「*אֱמוּנָה*」は、反意語の「*אֱמוּנָה*」と対比されているのではなく、「*אֱמוּנָה*」(彼の心)と対比されている。そして、この「*אֱמוּנָה*」は「*אֱמוּנָה*」に惚れていて、神に対して素直でない」と、具体的な表現で評言(Comment)が与えられているが、一方、「正しい者」に関しては、「自分の「*אֱמוּנָה*」によって生きる」と言われている。

ここで「生きる」ことが「死ぬ」ことと対比されていないということは注目に値する。即ち、「悪者はへ死ぬ／＼滅びる」が、正しい者はへ生きる」という図式が用いられていないのである。<sup>55</sup> 本節が、一章二節における「主よ。いつまで救ってくださらないのですか」という冒頭の問い掛けに始まり、「彼(＝カルデヤ人)は…容赦なく…殺すのだろうか。」(二・一七)という問いで締めくくられているハバクククの激しい訴えに対する、神からの応答であることを考慮すると、「悪者」の滅びに関する何らかのメッセージがここに期待されても不思議ではないだろう。しかしながら、「悪者」の滅びは、二章一三節後半<sup>56</sup>に至るまで、直接的には何も述べられていないのである。従って、二章四節後半の「生きる」*אֱמוּנָה*」(未完了形)という表現は、単純に「死なない」とか「滅びない」ということを意味しているのではない。それは、もっと積極的な、やがて「生きる」という約束の表明であると共に、「生きていく」という現在の状態の説明でもある。そして、この「生きる」ことは、神の前における「正しい者の「*אֱמוּנָה*」によってである。丁度、「悪者」と「*אֱמוּנָה*」との結び付きが論理的に矛盾しているように、「悪者」が「自分の「*אֱמוּנָה*」によって生きる」ということは事実上不可能である。「生きる」ことが正に神との正しい関係を基盤としているからである。このことは、本節が神による「発話行為」であることを考慮することによって更に明確になるであろう。

### C 神の「発話行為」

二章二節―四(五)節は、ハバクククの切実な訴えに対して「主」ご自身が応答されたことは、即ち神による「発話」(utterance)である。このことを考慮すれば、二章四節の「*אֱמוּנָה*」は、「神の目から見た正しい者」<sup>57</sup>のことを指しているものであって、単に「悪者ではないもの」(cf. 一・四)とか「悪者よりも正しいもの」(cf. 一・一三)のことを意味しているのではない。神の目から見た―即ち、神との関係において―「正しい者」とは、「貧しい人に対して義務

を果たす人」(Keller)とか「神に従う人」(新共同訳)というよりは、むしろ主によって「正しい」と判断された者のことを意味している。この意味において、Robertsonが本節の *πίστις* を “the justified” と解釈するのは正しい。<sup>103</sup>

更に、*πίστις* も、この神による「発話」の脈絡においては、「神に対する」その人のあり方を示す表現として捉える必要がある。本節は、「信仰によって義とされるのか、行ないによって義とされるのか」という「義とされる方法」の問題を扱っているのでも、また、「義認」が「義と宣告される」という法廷的な (forensic) 「概念」を意味しているのか、「義と認められている」という「契約概念」を指すのか、という「神学的」課題を直接的に論じているのではない。しかしながら、本節がハバククの訴えに対する「契約の神」主からの応答としての発言であることを考慮するとき、*πίστις* は、信仰者が契約関係において神と「堅く結びついていること」を意味していると言いうことができる。

また、神ご自身が「正しい者は、生きる」と言われたことに注目したい。それは、「生きよ」(アモス五・四)との命令ではなく、「生きる」との宣言である。「いのち」が、人の誠実な行為に対する報いとして提供されるというのではなく、むしろ「神に対する」ゆるぎのない確信・信頼のゆえに「賜物」として与えられているという宣言である。「生きる」ということは、正に、「いのちの主」によって「生かされる」ことを意味する。この「いのち」の約束は、「救いの神」ご自身が来られ、神の敵である「悪者」を滅ぼすこと(三・一三b)によって成就される。しかし、しばらくは、全てのものが死に絶えていくような状況(三・一七)にあっても、信仰者として「救いの神、主」にあつて喜ぶ(三・一八)のである。ここにこそ、「真実・誠実・信頼・信仰」(*πίστις*)によって「生きる」<sup>104</sup>「生かされる」者の姿がある。

\* \* \*

ハバクク書における「義」の問題は、聖書の「救済論」の研究にとって最重要の課題である。「救い」から「救い主」へ焦点が移っていく中で、「義」の問題も、救いの神ご自身との関係の中で理解されていくことになる。このことを明確に示しているのが、二章四節後半の「神のことは」である。この箇所が新約聖書の中で三回も引用され、「救い」の教理において重要な位置を占めることになったのには、それ相応の理由があったのである。

最後に、一九八五年の論文において提案した試訳とパラフレイズ訳

「見よ。彼は自惚れていて素直でない。」

しかし、正しい者は己れの *emunah* によって生きる。」

「見よ。カルテヤ人によって代表される悪しき者は、自惚れていて、

神に対して素直でない。しかし、神の視点から見た正しい者というのは、

神に対する彼の「真実さ」によって生きるのである。」<sup>105</sup>

を次のように改正して、この小論を終わることにしたい。





- (8) Palmer, *Semantics*, 100 ; Silva, *Biblical Words & their Meaning*, 130f. を参照。
- (9) の四節所の半の議論は D.T. Tsunmura, "Hab 2:2 in the Light of Akkadian Legal Practice," *ZAW* 94 (1982), 294f. を参照。
- (10) 「意味論的」について Lyons, *Semantics*, Vol. 1, Ch. 7 ; Palmer, *Semantics*, 29-32 ; A. Gibson, *Biblical Semantic Logic: a Preliminary Analysis* (Oxford : Blackwell, 1981), 47-59 を参照。
- (11) 津村俊夫「ヘブライク書一・四の釈義的考察」『途上』一五(一九八五) 一一一―一三六頁。
- (12) 筆者の調査によれば、四節後半に關して既に三四通りの本文修正案がある。「ヘブライク書一・四」の釈義的考察』四一―六頁を見よ。本文修正は、研究対象であるテキストそのものを改変して難題を解決しようとする「安易」な方法で、しばしば恣意的かつ主観的である。
- (13) この動詞は Hiphil の形で、民数記一四・四四に主の命令で「なめちた」ヘブライク語にカナン人に近づくことになった人々の「横柄な」態度を表現するために用いられる。W. Baumgartner & J.J. Stamm, *Hebräisches und aramäisches Lexikon zum Alten Testament* III (Leiden : Brill, 1983), 814 を参照。
- (14) Palmer, *Semantics*, 158-161 ; Lyons, *Semantics*, Vol. 2, 500-511 を参照。
- (15) ただし、二章四節前半が一章一―四節の語を述べて、二章五節が一章一―七節の語を述べて対する回答であることは、*Erforschung mit einer eigenen Beurteilung* …… 1977," *VT* 30 [1980], 122) から十分に明らかである。二章四節の「馳せ」は、*Das Buch Habakuk. Darstellung der Geschichte seiner kritischen Erforschung mit einer eigenen Beurteilung* …… 1977," *VT* 30 [1980], 122) から十分に明らかである。二章五節の「馳せ」は、*Das Buch Habakuk. Darstellung der Geschichte seiner kritischen Erforschung mit einer eigenen Beurteilung* …… 1977," *VT* 30 [1980], 122) から十分に明らかである。二章五節の「馳せ」は、*Das Buch Habakuk. Darstellung der Geschichte seiner kritischen Erforschung mit einer eigenen Beurteilung* …… 1977," *VT* 30 [1980], 122) から十分に明らかである。
- (16) 二章五節が四節に接するの理由を、*Linguistic Problems of Habakuk* II, 4-5," *JTS* 28 (1977), 1-18, 特別一―四頁を参照。この問題をめぐって最近の著者は S. Schreiner (1974), W. Rudolph (1975), H.G.M. Williamson (1980), A.H.J. Gunneweg (1986), D. Baker (1988), O.P. Robertson (1990) 著である。この問題は、*Linguistic Problems of Habakuk* II, 4-5," *JTS* 28 (1977), 1-18, 特別一―四頁を参照。この問題をめぐって最近の著者は S. Schreiner (1974), W. Rudolph (1975), H.G.M. Williamson (1980), A.H.J. Gunneweg (1986), D. Baker (1988), O.P. Robertson (1990) 著である。この問題は、*Linguistic Problems of Habakuk* II, 4-5," *JTS* 28 (1977), 1-18, 特別一―四頁を参照。この問題をめぐって最近の著者は S. Schreiner (1974), W. Rudolph (1975), H.G.M. Williamson (1980), A.H.J. Gunneweg (1986), D. Baker (1988), O.P. Robertson (1990) 著である。
- (17) 「ヘブライク書一・四」の釈義的考察』一一―三頁を参照。
- (18) J.G. Janzen, "Habakkuk 2:2-4 in the Light of Recent Philological Advances," *HTR* 73 (1980), 76.
- (19) B. Peckham, "The Vision Of Habakkuk," *CBQ* 48 (1986), 620 ; R.D. Haak, "Poetry' in Habakkuk 1:1-2:4?" *JAOS* 108 (1988), 444.
- (20) Janzen, "Habakkuk 2:2-4 in the Light of Recent Philological Advances," 61.
- (21) Janzen, "Habakkuk 2:2-4 in the Light of Recent Philological Advances," 67. 4段の用語を訳す。
- (22) Janzen, "Habakkuk 2:2-4 in the Light of Recent Philological Advances," 65-66.
- (23) A. Jepsen, "יָצַח, etc." in *Theological Dictionary of the Old Testament*, Vol. 1 (Grand Rapids : Eerdmans, 1974), 318.
- (24) A.H.J. Gunneweg, "Habakuk und das Problem des leidenden יָצַח," *ZAW* 98 (1986), 414.
- (25) O.P. Robertson, *The Books of Nahum, Habakkuk and Zephaniah* (NICOT ; Grand Rapids : Eerdmans, 1990), 178f.
- (26) D.W. Baker, *Nahum, Habakkuk, Zephaniah : an Introduction and Commentary* (TOTC ; Leicester : Inter-Varsity Press, 1988), 60.
- (27) 四節後半の「生かす」に對する「馳せ」の語の減じ又は「馳せ」の語及び四節前半に存在する語の理由を、前半節の本文の読み替えを提案する著者がある。例として J.A. Emerton, "The Textual and Linguistic Problems of Habakkuk II, 4-5," 16f. 以下、そのための本文修正の提案は、*Journal of Biblical Literature* 110頁以下を参照。
- (28) この箇所をめぐって D.T. Tsunmura, "Ugaritic Poetry and Habakkuk 3," *Tyndale Bulletin* 40 (1988), 24-48, 特別四〇―四四頁を参照。
- (29) F.E. Gaebel, *Four Minor Prophets : Obadiah, Jonah, Habakkuk, and Haggai : their Message for Today* (Chicago : Moody Press, 1970), 167.
- (30) Keller, *Nahum, Habacuc, Sophonie*, 159.
- (31) Robertson, *The Books of Nahum, Habakkuk, and Zephaniah*, 183. 彼は、*Justified* (by faith) shall live by his steadfast trust" といっている。
- (32) 津村俊夫「ヘブライク書一・四」の釈義的考察』一一―三頁。
- (33) *LXX* の *ἐξ ἀπορίας μου* は「*objective genitive*」である。「*objective genitive*」は「*objective genitive*」である。

このことは、(1)マソラ本文の *עוד* の接尾辞「*ע*」が書記の書き誤りによるもので、本来は、一人称の接尾辞「*א*」であったか、あるいは、(2)「*ע*」の背後にあるヘブル語の本文においては、一人称の接尾語「*א*」が用いられていた、ということの意味していると考えられることもできるが、(3)「彼の(わたしへの)信頼」と訳し得るヘブル語本文が、そのまま解釈されて、「*ע*」の訳者によって *ex notis* と訳出された、と考えることもできるかも知れない。

(聖書宣教会・聖書神学舎、教師)